

この章では、どのようにしてシンカルコにいるウェマク王に、生贄の皮の贈物を携えた矮人とせむしたちが使者として派遣されたかについて記す。

106 章 生贄となった者たちの皮が剥がされ、モンテスマのもとに届けられた。数日後、モンテスマは魔術師たちと、自分の奴隷であるショロたちを呼び集めた。そして使者たちに皮と奴隷を与えて、次のように命じた。「シンカルコの楽園に行き、これらのショロと皮をウェマク王に贈り、こう言うのだ。『私たちは、あなたの従僕であるモンテスマから多くの伝言を預かっています。〔モンテスマは〕あなたが彼を掃除役として受け入れることを望んでおり、命じられたことはすべて行うつもりでいます。』」 こうして使者たちはシンカルコの洞窟におもむき、その中に入っていった。そこにある 4 つの道はすべて下り坂で、その一つを彼らは降りていった。すると、まもなく、手に杖を持ったトテクチカワ¹という老人に出くわした。その老人は言った。「お前たちは何者だ？ どこから来たのだ？」使者たちは答えた。「私たちは、ここの王に会うために来たのです。伝言を預かっています。」老人は言った。「どの王を探しているのだ？」使者たちは答えた。「ここの主、ウェマクです。モンテスマが私たちを派遣したのです。」そこでトテク〔チカワ〕は言った。「よかろう、お前たちを案内しよう。」ウェマクのいるところに着くと、この案内人は言った。「王よ、主よ、地上のマセウル〔平民〕たちがやってきました。モンテスマが遣わせてきました。」王は答えた。²「モンテスマは何と言っているのだ。」「王よ、モンテスマはこれらの皮を贈って、あなたの高貴な足と手に口づけをすることを望んでいます。そして、掃除役として働くことを、また王家への奉仕となるあらゆることを行うことを、あなたが認めてくれるように望んでいます。」ウェマクは答えた。「モンテスマは、何をしたいと言っているのだ。この王国とこの住居を私にお与えになった主は、偉大な主として、それを私にお与えになったのだ。哀れなモンテスマに言うがいい。奴は何に困っているのか。何を助けて欲しくて、私にこの者たちを送ってきたのか。さあ、帰って、私が言ったことをモンテスマに伝えるがよい。」さらにウェマクは使者たちを呼びとめて、こう言った。「このチルチョテ〔トウガラシの一種〕、シトマテ〔トマト〕、センポアルショチトル〔マリーゴールド〕、エローテ〔トウモ

¹ 原注 242 人差し指を伸ばした手。ドゥランでは、(神官のように) 全身を黒く塗ったトテクと呼ばれる者に案内される。Totec (我らの主) + chicahua(c)強い の意味か？

² 原注 243 注。

ロコシ)、柔かいシローテ〔トウモロコシのひげ〕を、モンテスマのところに持っていくがよい。」こうして使者たちは地上に戻り、ウェマク王の返事をモンテスマに伝えた。彼らはモンテス〔モンテスマ〕に贈物を渡し、ウェマク王が言った通りに、その返事を伝えた。するとモンテスマはペトラカルカトル（^{マヨルドモ}重臣）を呼び、怒り狂って、こう言った。「この愚か者たちを連れ去って、木製の牢に入れて、石を投げつけて殺してしまえ。」それからホロ〔ショロ〕（奴隷）たちを呼び集めて、こう言った。「お前たちはシンカルコに行き、ウェマク王の^{しもべ}従僕であるこのモンテスマの代わりに、王の手に口づけをするのだ。そして、勇敢なる王に、心を込めてお願いするのだ。私が一介の^{しもべ}従僕として、掃除やその他の王宮の仕事をするために王に仕えることを、認めてくださるようにと。この人皮を、王への贈物として持っていけ。よいか、この伝言を携えてどこに向っているのかを、決して人に言うではないぞ。さもなくば、燃えさかる炎の中に、お前たちや、お前たちの妻子を、生きたまま投げ込むぞ。」こうして彼らはひそかに出発し、洞窟に入り、歩いていると、間もなくそこに住んでいる者の一人に出くわした。その者は盲人（イシュテペトラ）のようであり、その眼は藁の先のように細く、その口も同じようであった。彼は使者たちに尋ねた。「お前たちは何者か。どこから来たのだ。何が望みだ。」使者たちは答えた。「私たちはモンテスマの使者であり、王と話をするために参りました。」すると彼は尋ねた。「どの王に、話を聞きたいのだ。」使者たちは答えた。「ウェマク王です。」彼は言った。「よかろう、あちらへ参ろう。」到着すると、言った。「王よ、主よ、あなたに会って話をしたいという地上の者たちを連れてまいりました。」王は言った。「こちらへ来るがよい。何が望みだ。誰に遣わされてきたのか。」使者たちは、モンテスマ王がウェマク王の高貴な足と手に口づけをし、掃除やその他の王宮の仕事をして仕えることを認めてくれるよう望んでいることを伝えた。「これは、モンテスマからあなたへの、ささやかな贈物です。モンテスマの悩みは、ネサワルピリが死ぬときに言ったいくつかの事柄です。それは彼をひどく悩ませており、心が休まることはありません。なぜならネサワルピリは、モンテスマの身の上に起きるであろうことを語ったからです。同じように、クイトラワク³の要人であったツォンパン・テクトリも、モンテスマの身の上に起きるであろうことを語りました。彼は、深夜に天を見上げると、白い雲が近づいてきて大きくなり、明るい陽の光のような煙が噴き出して、見続けることが難しかった、という話をモンテスマにし

³ メキシコ市トラウアク。

ました。何よりもまず、あれは何だったのか、何を意味するのか、モンテスマに示していただきたいのです。」ウェマクは言った。「モンテスマは何を言っているのか。奴はここが地上みたいなものだと思っているのか。奴が王座にいるような態度では、一日どころか一時間ももたないぞ。私もここにいる者たちすべても、何も見ていないとでも奴は思っているのか。地上にいたときのようにではなく、まったく違っているのだ。地上にいたとき、そこには歓喜と休息と満足があった。いまや、すべてが苦しみだ。この場所は地上とは違う。よく言われているように、喜びに満ちた楽園ではなく、終わることのない苦しみ地なのだ。このことをモンテスマに告げよ。もしもこの恐ろしい場所を目にしたなら、奴は固い石の中に逃げ込みたいとさえ思うだろう。奴は今は、好きなだけ快樂にひたることができる。貴石も黄金も豪華な羽根細工も、様々な美しい布も、素晴らしい食事と飲み物も楽しむことができる。それ以上のことを知ろうとするな。行け、奴にそう伝えよ。」使者たちは地上に戻ると、言われた通りのことをモンテスマに長々と話した。それを聞いたモンテスマは激怒し、ペトラカルカトルを呼んで言った。「この者たちを、今すぐに木製の牢に入れよ。そして、ある場所に遣わすために2人のアチカウトリたちを探してくるよう。」それから、モンテスマは彼らに言った。「祖父らよ、シンカルコの洞窟に、ウェマク王への伝言を携えて向かうのだ。」そして、ネサワルピリが語った天の白い雲の幻影の意味について、長々と話をした。「それは私の身の上に起こるという。このことの意味は何であろうか、私の身にふりかかる不思議なこととは何であろうか。これを明らかにしてもらいたいのだ。私が頼みたいことは、これだけだ。私が行くことは許されないだろうから。そして、よいな、このことは誰にも話すな。この世の誰にも知られないようにせよ。お前たちは優れた者であるから、命令したり指示したりすることのできる部下を持つことになるだろう。しかし、もしもこのことを外に漏らしたなら、そのことでお前たちや、お前たちの妻子は、死ぬことになるだろう。そしてお前たちの家は、地下水⁴が流れ出てくるくらいまで打ち壊されるだろう。いま言ったように、お前たちを主人にしてやるということを疑うではないぞ。」命令を受けた使者たちは、人皮の入ったチキウィトル〔籠〕を背負って出発した。そして洞窟に到着し、中に入っていくと、アクアクアウという名の者に出くわした。アクアクアウは尋ねた。「お前たちは何者か。」使者たちは言った。「私どもはモン

⁴ ドウランの68章に、家屋を壊す際に、その土台まで地下水が出てくるくらいに掘り崩す、という表現がある。

テスマの使者でございます。王への伝言を預かってまいりました。」アクアクアウが、どの王のことかと尋ねると、使者たちは言った。「ウェマクです。」アクアクアウは言った。「そうか、では参ろう。」こうして使者たちはウェマクのいるところに連れて来られると、その前でひざまずいて言った。「王よ、私たちは、あなたの忠実な従僕^{しもべ}であるモンテスマによって遣わされた者です。ここにささやかな贈物があります。モンテスマはあなたに、自分を冷たくあしらったりせず、従僕^{しもべ}として仕えさせてほしいと望んでいます。なぜなら彼は、自分の生きている間に起こるであろう恥辱と不名誉を、目の当たりにしたくないと思っているからです。」〔ウェマクは答えた。〕「奴は、自分の哀れさを知るべきであろう。その哀れさは、その生き様によって、自ら望み求めたものだ。奴の名前自体が既にそのことを物語っている。奴はあまりにも傲慢であり、人に対して冷酷である。奴に言うがよい、苦行と断食を行い、これまで口にしていたような豪華なものは食べないようにと。そして、手中に収めている支配地や権力を少しずつ手離していくようにと。豪華な花々、御香は、身から遠ざけ、食べ物はわずかなミチワウトリ〔アマランサス〕の丸パン、飲み物はいったん熱したものの、それと匙一杯分の煮豆とすること。何よりも、妻たちを遠ざけ、彼女らに近づかないようにすること。この苦行を行ってから、自身に対してなされた予言にあらためて向き合うのだ。それを行わないのなら、私はときおり奴のもとに赴くぞ。このことを伝えるがよい。」使者たちは恭しく拝礼をした後、地上へ戻り、命じられた通りにモンテスマ王のもとに赴いた。モンテスマは熱心に〔使者たちの言葉に〕耳を傾けた。「もしもあなたがこのことを成し遂げたなら、チャプルテペクの丘の上からトラチトンコ⁵という場所に、あなたを迎えに来るそうです。それを終えたら、あなたを自分のところに連れて行くそうです。『私は見ているので、モンテスマはトラチトンゴ〔トラチトンコ〕・アネパントラ（湖および水の真ん中）に行くように。そうすれば、私はそこに迎えに行く。しっかりと身なりを整えさせよ。そこから先は私が連れて行く』と、ウェマク王は私たちにおっしゃったのです。」この良い知らせを聞いたモンテスマ王は心の底から安堵した。そして使者たちによく休むように命じ、彼らは十分な食事をとった。そのあと、10ブラサと5ブラサの豪華な布、彼らが身にまとう実に豪華な布、小ぶりの布、2袋のカカオ、2箱のトウモロコシ、2包みのチレ〔トウガラシ〕、2包みの綿、さらにチアン

⁵ 語彙集によればテパネカ領内（地点不明）。

〔チアシード〕、カボチャ種、ナグア⁶〔腰巻〕、ウェイピル〔ウィピル、肩衣〕を与えるようにと、ペトラカルカトルに命じた。それから重臣たちを呼んで言った。「よいか、兄弟たちよ、ここにいる二人の者はお前たちの中に加わって、お前たちの中の一人として、簡易な事柄について判断したり決定を下したりすることになる。」重臣たちは、このことに同意した。モンテスマはこの二人に、くれぐれも秘密を胸の中にしまっておくように、かの探訪のことを口外したならば、身体を切り刻まれることになるぞ、と念を押した。モンテスマは重臣たちを呼んで言った。「よいか、もし誰かがお前たちの娘を所望したなら、娘をその妻として差し出せ。あるいは、それについて私に知らせよ。」これはつまり、今日言うところの正妻を除いて、モンテスマが持っていた全ての妻たちは、彼ら〔重臣たち〕の娘であったということである。こうして少しずつ、モンテスマ王はこの世を捨て、驕りをなくしていった。食べ物や飲み物、花々、豪華な香炉、すべてを手離していき、あらゆる衣服も、豪華な布も、王家の調度品も、重宝することをやめた。そして身一つになって、80日間の断食と苦行を全うした。

【訳：岩崎賢 2024/03/10】

⁶ タイノ語。